けいおん! 新たなる軽音部

stringHz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 新たなる軽音部

【コード】

N6399I

【作者名】

stringhz

【あらすじ】

この話は、軽音部の4人が高校2年になる時（梓未登場）のころからの物語である。

とある事情で桜高に転校することになった俺。学級の席の周りは個性的なあの人たちだった！

一言でまとめると、軽音部に入ることになった、もとい、強制入部させられた、俺の日常を綴ったような物語だ。

あ、そうそうこの物語は大体俺の一人称。俺にはある過去があるから、ときどき文章がおかしいんじゃないか？と思う人もいるかも知

れないが、それは今のところは気にしないでくれ。
いずれ、皆さんにも話す機会があるだろうし。
では、あとは小説内で会おう。

小説執筆は初心者です。文章はまだまだ未熟かも知れませんが、
どうぞ最後まで宜しくお願いします。

プロローグ

プロローグ

俺が高校1年生、性格に言えば、高校2年生になる前、俺はある事情あって

桜高へ転校することになった。ここは今年、つまり今年入学してくる高校生たちが、

男女共学になった場所。つまり、新2・3年生が女子のみ、1年生が男女である。

つまり、俺は、孤独になるはずだった。

クラスの回りはみんな女子。居心地は悪いし、男子で盛り上がる話題なんてできやしないだろう。

いつも、俺は1人ぼっちで、唯一、昼休みに1年のところへいって自分の知り合いと話すことぐらいが楽しみなのだろうと思っていた。

あの4人、後増えた1人に振り回されるまでは。

俺は、2年2組だった。担任に連れられ、教室で挨拶した後、席につくこととなった。

もともと女子校だから、勿論男子なんて珍しい訳で。それに、こういうことにはそれ程慣れてはいない。だから不安だった。

転校してからの学校生活が1週間を過ぎた。

俺の席の右隣がドジで天然っぽい女子、唯。

そして、後ろには四六時中騒がしいそんな元気な女子。

左隣にはどう見てもお金持ちでありそんなお嬢様っぽい女子。上から俺に話し掛けてきた順だ。

・・・といっても、俺と唯は幼馴染みらしいのだがな。実は。

んで、昼休みには2人、元気な「律」っていうのと「紬」だったかな。
に囲まれて、質問してきたり、「軽音部は男子も歓迎ー」とか言ってきたり。
どうやらこの2人は軽音部らしい。滅茶苦茶個性的なんだろうな、部員。

周りは新入生歓迎会の準備で忙しいようだ。他の人たちは部活動誘いのポスターを
作っていたりとか、していたが、唯含む3人は遊び回っている。いいのか？

あ、そうそう。困ったことに、どうやら歓迎会で学校生活のクラス劇をやるらしい。
このクラスが代表で。
ツッコミ側である俺としては「俺も一応新入生だ！」と先生に試しに突っ込んでみたものの、
「そうか、頑張れ」の一言で済まされてしまった。まあいい。

余談はさておいて、律に手を引つ張られ、無理矢理音楽室へと連れて行かれた。

まあ、俺も軽音部だったし、見学するぶんには別にいいのだが。

入ればツッコミどころ満載だった。

- ・部員がティータイムしてのんびりしている
 - ・顧問が謎である。部員も謎だが。
 - ・軽音に關係ない備品がたりさんある。
 - ・目指せ武道館！・・・夢は大きい方がいいのか？
- 部員は唯、律、紬の3人と、あと1人「漣」っていうのがいたな。すぐく、恥ずかしがり屋みたいだった。ステージ大丈夫なのか？

と。まあ、あとは略すとして。
なんだかねで、強制入部させられたのはいうまでもない。タイトルの的に。

これは、俺の新しい学校生活を綴った物語である。

あ？俺の名前か？楽しみをとっておく為にも秘密にしておこう。
といっても、結局は第1話には明かされてしまうのだが。

小説執筆初心者ですので、まだまだ未熟なところもありますが、
どうぞおつき合い下さい。

なお、時間設定ですが、唯達が2年へ進級する頃（梓未登場）となっております。

第1話：新歓！？

入部して早々、新入生歓迎会でステージ発表があることを聞かされる俺。

いや、あと3日で、2曲引けるようにしろだって！？辛い……。

登場人物紹介（前書き）

1話の情報更新済。第2話で判明することは一部記載済。

登場人物紹介

登場人物紹介

(これからの話で明らかになったことは追記して行きます。)

空地 伸かいち しん

今作の主人公。桜が丘高校2年2組。楽器担当現在不明。11月27日生まれ(射手座)、身長163cm、体重58kg、血液型は不明。

今作は、大抵彼の視点からの一人称で物語が進められるが、彼は半年前に交通事故で記憶を失っている為ときどき文末がおかしくなる。車がトレーラーに突っ込まれる事故で、小学生の頃に両親を亡くし、中学卒業まで祖父母と暮らしていたが高校生になってから1人暮らしするようになった。

今年から男女共学となった桜高へ転校することとなったが理由は幼馴染みである唯が通っているため。

唯とは生年月日が一緒に幼馴染みである。第3話以降、伸は平沢家の居候として住むことになったが、多少奴隷扱いされているらしい。

平沢 唯

桜が丘高校2年2組。リードギター担当。11月27日生まれ(射手座)、身長156cm、体重50kg、血液型はO型。おっちょこちよいな天然ドジっ娘。

軽音楽部に入部するまでは楽譜も読めない音楽初心者だった。現在も音楽の専門用語・ギターコードなどについては詳しくない。

一方で、チューナーを使わずにチューニングを行うという特技を持つことから、絶対音感(相対音感)とも言われている。

秋山 澪

桜が丘高校2年1組。ベース担当。左利き。血液型はA型。長身・黒のロングヘアースタイルが特徴的。ルックスと姐御口調に似合わない、人見知りが激しく寂しがり屋。事ある毎に貧乏クジを引かされている。成績は優秀。また、怖い話などを苦手としている。曲名や歌詞において独特のセンスを持つ。

田井中 律

桜が丘高校2年2組。8月21日生まれ（獅子座）、身長154cm、体重48kg、血液型はB型。軽音楽部の部長を務めている。愛称は「りっちゃん」。ショートカットにカチューシャをしているのが特徴。社交的な性格だがストリートかつ大雑把で、「指でちまちまする」ような細かい楽器が苦手という理由からドラムを担当する。ドラムの腕に関しては、活きが良くパワフルとのことだが、「走り気味」と評されることも多い。

琴吹 紬

桜が丘高校1年生、原作第2巻より2年2組。キーボード担当。愛称は「ムギちゃん」。7月2日生まれ（蟹座）、身長157cm、体重53kg、血液型はO型。唯が「ギー太」を購入したレコード・楽器店「10GIA」も系列会社のひとつであり、とある無茶を店員に要求したりしている。4歳の頃からピアノを習っていてコンクールでの受賞歴もあり、キーボードは上手である。部室にティーセットとお菓子を持ちこみ、部員や来客に振る舞っている。

原作では澁が「ムギは怒らせないように注意しよう」と述べている。

中野 梓

桜が丘高校1年2組、軽音楽部の新人部員。リズムギター担当。唯

達の1学年下で憂とは同じ学級。小柄な体格で黒髪ツインテールが特徴。

唯がつけた愛称は「あずにゃん」。また1度だけ憂から「あずさ2号」と呼ばれたことがある。

両親がジャズバンドをやっていた影響で小学校4年生の時からギターを学んでいるため、演奏技術は唯より優れており、専門知識にも詳しい。

日焼けしやすい体質である。

山中 さわ子

桜が丘高校の音楽教師で吹奏楽部兼軽音楽部の顧問。1月31日生まれ（水瓶座）、身長165cm、体重56kg、血液型はB型。同校のOGでもあり、軽音楽部に所属していた。

真鍋 和

桜が丘高校2年1組。唯の友達で幼馴染み。1年次より生徒会役員を務めており、ショートカットと太枠アンダーリムメガネが特徴。

2年次は澁とクラスメイト。

現在、唯と幼馴染みであつても1主人公と幼馴染みであるかは明かされていない。

平沢 憂

唯の1歳年下の妹。だらけがちな姉の唯とは正反対に、真面目で礼儀正しい性格。原作第2巻から桜が丘高校に進学した（学級は1年2組）。

軽音楽部員ではないものの、折に触れて唯たちの活動をサポートしており、風邪を引いた唯に変装し、代わりとして軽音部に参加した際には数日練習しただけでギターを弾きこなし、周りを驚かせた。唯と主人公とともに昔は共によく遊んでいたらしい。

一部Wikipediaより転載。

#01 新歓!?

「ふわぁー」

俺はあくびをした。とにかく眠い。

そりゃそうだ。いくらなんでも短い期間で曲を2曲も弾けるようにしろなんて。

一応俺は軽音部だったらしいから、音符はわかる。もちろん基礎はできている。

けど、あと2日だ。まあ、見た感じ担当パートは割と簡単そうだったのは救いだ。

ちよっと過去にさかのぼる。昨日だ。

「伸ー、ちよつとちよつとー」

俺が、久々だったのかわからないが自分のベースを取り出して、チューニングをしていると、唯によばれた。

おれはとりあえず、ベースを置いて、ティータイムをしている4人のもとへ向かった。

「何だ？」

なんで部活に来てティータイムをするのかは謎なのだが、それはそれいいとして。

「りつちゃんが、これを」

「すると、律は鞆の中から紙をとりだすと、俺に差し出す。」

「ほい、これを新入生歓迎会までに弾けるようにしてねー」

渡されたのは楽譜。えーと、ふわふわ時間、わたしの恋はホツチキス、か。

てか、これ作詞したの誰だ？

「あ、それは漣だよ」

律が地の文の質問に答えてきた。うむ。漣のセンスは独特だな。

って、ちよつと待て、感心している場合じゃ無い、俺が言いたいのは

は・・・

「新人生歓迎会まで、あと3日じゃないか！」

「うん、頑張れー応援しとるー」

棒読みで律が答えてきやがった。もうケーキモードに入っている。

「んで、当日はこの2曲をやるのか？」

「ああ、当日は4曲。全部は大変だからこの2曲を頼めないかな？」

「ちなみに4曲とも作詞者は？」

「わ、私だ」

うむ、全員が作詞するわけじゃないんだな。・・・って

「てか、4曲中2曲演奏って中途半端じゃねえか！」

「まあまあ、とりあえずケーキ食べませんか？」

袖がケーキを俺に差し出してくる。俺は「どうも。」といってケーキを食べた。

「おう、これ美味しいな・・・ってちつがーう！」

「じゃあ、4曲弾くか？」

「いえ、遠慮しておきます。」

中途半端だが、4曲弾く方が辛い。俺は引き下がっておく。

と、まあこういうわけだ。昨日は徹夜。

1曲はある程度弾けるようになったものの、まだリズムが少し違ったりする。

授業中眠ってしまいそうだ。唯に寝てたら起こすように頼んでおくとするか。

とりあえず学校に着いた。とりあえず先生がくるまで寝ておくとしてよう。

「伸ーおはよ、弾けるようになった？」

俺が心地よく寝ていると、誰かが起こしてきた。誰だ？

「・・・伸って呼ぶのは幼馴染みである唯だけだから、唯か。」

「あー1曲な。お陰さまで眠い。昨日は徹夜だった。」

「そっかー、大変だね。ところで・・・」

「大変だと思うならとりあえず寝かせてくれ。」

唯は「ほーい」といって、寝かしてくれた。よし、もう少し寝るか。
「空地ー、弾けるようになったか」

「ぐへえっ！」

「おい、大丈夫か？」

律だ、おまけに俺の頭にチョップまでいれてきやがった。

「いきなり頭にチョップしてくるやつがあるか！徹夜して眠いんだ
！」

「ああ、悪い、で、1曲くらいは」

「ま、なんとかな。とりあえず眠らせてくれ。」

ふう。これで寝られるだろう。あと10分は寝られる。

途中、紬が来た気がするが、悟ってくれたのかそっとしておいてくれた。さすが。

8時になり、先生も来たので、俺は起きることにする。まだ眠い。

「あー、唯、もし授業中ねてたら起こしてくれないか。」

「うん、いいよー」

唯に頼んでおいてちゃんと起こしてくれるかは不安だが、まあとりあえず安心だ。

一時限目「数学？」

あの先生の話の聞くと凄く眠くなる。やばい、寝そうだ。

「んで、これが・・・にな・・・3にな・・・から・・・9・・・」

・・・

「・・・い・・・し・・・おい、伸！起きろ！寝るな！」

「・・・はっ！」

どうやら寝てしまったらしい。つか、唯起こせよ！小さい声で問いかける。

「唯、唯、起こせていったる！」

「あ、ごめん、忘れてたあ、ごめんね」

いや、可愛く つけられてもなあ。別の人に頼んでおくか。

「律、寝てたら起こしてくれないか？」

「おけ。特別痛いチョップで・・・」

「あ、やっぱりいいです。」

この人だつたら本当にやりかねない。朝の痛みを思い出してしまつた。

「紬、もし俺が寝てたら起こしてくれないか」

「あ、はい。わかりました。」

よし、紬なら安心だ。これでとりあえずはいいとして。

・・・

あつけなく終業チャイムが鳴った。

ちゃんとした人に頼んでおくと寝れなくなるもんなのかと思ひながら、

軽音部より謎の部活が並んでいる廊下を通り、階段を上がり、音楽室へ入った。

「調子はどうだ？空地？」

「ああ、1曲だけ。」

入った瞬間に漣に問いかけられ、その返事をする俺は座り込み寝る。

それを見た律が、俺が知らなかった収納スペースを開けた。

「あ、空地、布団あるぞ？寝るか？」

「いいよ！てかなんで軽音部に布団が常備されてるんだよ！」

「それは、3年前のことだ・・・」

「その怪談話すような口調止めるよ！てか怪談関係ないだろ！」

みると壁の端で漣が「怖くない、聞こえない」と呟いていた。

怖い話駄目なのかこの人。

唯は紬の持ってきたお菓子食べているし、紬はなんかぼーとしてい

る。

滅茶苦茶だなこの部活。

「歓迎会に向けて少しは練習しろ！」

俺が大声で一喝いれると、全員が「はい。」といって準備を始めた。で、今日はふわふわ時間を合わせてみた。

まあ、結果はそこそこだ。こんな部活でこんなにはできるとはという疑問を抱いたが。

帰りは、唯と一緒にである。家も近いし、幼馴染みらしいしな。

「あのさ、いつ練習してんだ？」

「ほえ？」

いきなり問いかけられたので聞き逃しているようだ。

「だから、いつ練習してるんだ？って。」

唯は、少し考えた後、

「私は、家で練習して、たまにみんなであわせるくらいかな」

「そうか」

「ま、家で練習するのもきまぐれなんだけどね」

「気まぐれかよ！」

それだけで、あんな演奏ができるのは何故なのだろうか。

「あ、今日、私の家に来ない？」

俺は、唯に問いかけられた。どうせ両親はいないので1人だし、行くか。

・・・

「ささ、あがってあがって」

「お邪魔します」

「あ、いらつしゃい、伸さん、お久しぶりです」
相変わらず両親はいないようだ。

ちなみに今出迎えてくれたのが、唯の妹の憂。

姉とは真逆にとてもしつかり者で、母親がいない時の家事担当である。

俺は靴を脱いで、それをそろえるとリビングへ向かった。部屋は丁度掃除を終えたらしく、埃1つ無かった。

「あ、腰掛けてゆっくりしててください。」

俺はまるで初めてお邪魔した時のように「どうも」といって座った。憂はエプロンを付け、キッチンへと向かう。

唯は2階に荷物を置いて、私服に着替えた後、ここにきて寝転がっている。

本当に姉妹いれかわった方がいいんじゃないかねえかと言いたいところであるが、

そうすると憂が一所懸命姉をフォローしようとするのでやめておく。

「はい、できましたあー」

しばらくすると憂が料理の載せられた皿を運んできた。

「どうやら、今日は野菜炒めと魚、ご飯とスープのようだ。」

「すみません、こんなのしかなくて」

「あ、いやいや、こっちは御馳走になる身だから。」

「いやあ、本当に出来た子だ。それにくらべて姉は。」

「いつたきまーす」

「おい、待てまだ全部運ばれてないだろ」

俺は早速食べようとしている唯の頭を押さえる。

憂が席に着くと、抵抗しようとしている唯から手をはなした。

「いただきます」

・・・

そんなこんなで夕食を終えた。

気付いたらもう夜遅かったので客室を借りて泊まることになったが、だからってのんびりもしてられない訳で。

俺は部屋に荷物を置き、ベースを取り出し、昨日やりきれ無かった、2曲目、わたしの恋はホツチキスの練習を始める。難易度は低めだ。1時間もしないうちに通して弾けるようになった。

1小節に音符1つか2つくらいだけでつくづく助かった。

1曲目の復習をしていると、ドアが「コンコン」と叩かれたので、

「どうぞ」と応えると、唯が入ってきた。

「なんだ？五月蠅かったか？」

「違うよー、私も練習しに来たのー」

そつえばギターを所持している。

んで、結局、俺と唯は、2人で合わせてみることにした。

「ふむう、まあまあだな、あとは他の楽器とあわせてどうなるかな」

「うん、明日には合わせられそうだね、じゃ、私寝るねー」

唯がでていくと、こんどはすれ違いに憂が入ってくる。

「練習、お疲れ様です。」

憂は持ってきてくれたお茶を差し出してくれた。

「どうも。憂は部活決めたのか？」

「あ、私は、両親がよく出かけることが多くて、それで代わりに家事をしなければならなので、今のところは帰宅部です。」

「そうか、あんな姉をもって大変だな。」

思わず口にしてしまう。勿論、憂は「お姉ちゃんは今私を手伝ってくれたり」

とまあ、こんな感じだ。

「もし、新入部員が誰も居なかったら、憂が入部してあげな」

「あ、考えておきます。では失礼します。」

もうすぐ0時になる。俺もお茶を飲み、寝ることにした。

本番前日、5人で演奏した結果。割と合っていた。

律のドラムは走り気味だし、唯は音楽用語等も素人であるのに、全員で演奏するとかかなりいい感じになる。本当に不思議だ。

「よし、あとは本番だな、漣、今回も期待しているぞ」

「もうその話は口にするなあ」

・・・過去に何かあったのだろうか。漣の顔は真っ赤であった。

そして、当日。

衣装は、制服。顧問の山中さわ子先生（通称：さわちゃんらしい）が、衣装を用意していたが、結局は女子4人に却下されたらしい。なんか、とんでもない衣装でも作ったのだろうか。

「次は、軽音部です。」

アナウンスが入る。俺達は入場した。唯のMCから始まる予定だ。

「どうも軽音部です。新入生のみなさん、ご入学おめでとうござい
ます。」

「私 最初軽音部って聞いて軽い音楽だと思っていたんですよ」

そ、そうなのか？軽い音楽って何すんだ？

「カスタネットができればいいかなーなんて軽い気持ちで入部しま
した！」

カ、カスタネット!？

「なので、みなさんもそんな感じで気軽に入部して下さい！」

よし、終わりだな。律のかけ声を待っただけだ

「・・・あつ、でもカスタネットは実は難しいってさわちゃんが言
ってました。」

おいっ!・・・カスタネットって実は奥が深かったりするののか？

「・・・あ さわちゃんっていうのは音楽の先生のあだ名なんです
け・・・痛っ！」

「さっさと始めろ！」

俺もそう思ったところで、律が言ってくれた。

ふわふわ時間から始まり、唯が少しミスを犯したがなんなくこなし
た。

「うーん、誰もこないなあ」（律）

「ライブ上手くいったと思ったのに！」（唯）
「やっぱり軽音部って人気ないのかな・・・？」（漣）
とまあ、入部希望者がくるのを待っている訳で。だが。
「そんな目で見てたら来るものもこねえだろ（きませんよ）」「
紬と俺で一言いっておくと、3人は音楽室のドアから退き、
「こうなったら、憂ちゃんを拉致るしか・・・」
いっておいしたが、拉致はやめとけ律。
すると、静かに音楽室のドアが開いた。
「軽音部ってここですか？入部希望なんですけど・・・」

続く。

第2話 音楽

軽音部にやってきた1人の新入部員。だが、この部活のやる気の無さに、

自分は本当にこれでよいのかという戸惑いを見せる。
そんな戸惑いを見せる新入部員に、伸は声をかける。

#02 音楽

新人生歓迎会を無事終わらせることが出来た俺達。

放課後、新入部員はもしかしたら来ないのかと思っていたが、静かにドアが開き、この一言。

「軽音部ってここですか？入部希望なんですけど・・・」

第2話：音楽

「ようこそ軽音部へ！」（律）

「お名前は何て言うの？」（唯）

「あ・・・中野・・・」

「パートは何やってるの？」（律）

「あ・・・えっと・・・」

「誕生日は？血液型は？好きな食べ物は？」

「えっと・・・あの・・・」

「落ち着けお前ら」

俺と漣がここで2人を制す。

「さて、自己紹介をどうぞ」

そこで丁度良く、紬が仕切ってくれる。

「えっと 1年2組の中野梓といます。」

「パートはギターを少し・・・」

「あ、じゃあ唯と一緒になのか。」

さて、技量はどちらが上なのか。ちよいと楽しみだ。

「よろしくお願いします、唯先輩！」

唯の動きがとまった。どうやら意識があっちへ行ってしまったようだ。

「おーい、帰ってこい」

反応がないようなので、戻ってくるまで放っておくことにしよう。

くお願いします！」

「ま、眩しすぎて直視できません・・・」

「それじゃ、入部届受け取ったから、明日からよろしくねー」

唯の発言は完全スルー。ちよつと落ち込んでいた。

「それじゃあ、失礼します」

全員で見送る。

「・・・わ、私どうしよう」

「練習しとけ」「」「」

翌日

「こんにちはー」

元気一杯に梓が入ってくる。

「お、元気一杯だな」

「はい、放課後が待ち遠しかったです。」

「それじゃあ、早速・・・お茶にするか」

「はい」

紬が立ち上がって準備を始める。梓はあっけにとられている。

きつと心の中では（えーっ！？）と思っているに違いない。

「あのー、部室でこんなことしていいんですか？」

案の定、梓は問いかけてくる。

「大丈夫、大丈夫！」

いや、本当はいけませんよ！しっかりして下さい部長！

ガラガラ……

顧問が登場。

「あ、先生、あの、その、これは…私ミルクティーね」

「はい」

うん、きつとまた（ええーっ）と思っているだろう。

紬も何のためらいも無くミルクティーをカップに注いでいる。

「で、この子が新人部員？ 顧問の山中さわ子です。よろしくね。」

「よ、宜しく願います」

あ、そうそう、俺の特技はある程度人の心が読めること。

今、梓は（綺麗な人だなあ）と、さわちゃんは（ネコミミとか似合
いそうね）と考えているはずだ。

梓、その先生についていくと、碌ろくなことにならないぞ。

ん、いま梓が何か悟ったらしい。ギターを取り出そうとしている。

（もしかして私の自主性が試されているのかな…じゃあ早速……）
そして、梓が思いつきりギターをひく！

「うるさい！！」

「ええーっ！？」

「さ、さわちゃんのアホ！」

律がさわちゃんを説教する。漣がフォローに回る！

「ごめんね、あの先生ちよつと変なの。」

いや、あの人とんでもなく変な人ですよ。はい。

「こ、こんなんじゃダメですー！！」

「みなさんやる気が感じられないです！」

「音楽室を私物化するのもいけないと思います！」

「ティーセットは全部撤去すべきです！！」

あらま、スイツチ入りました。完璧に。

そこへ、唯が抑えにかかる。そして頭を撫でる！

何をしているんだ？そんなので大人スイツチがきれるしくなるはずないぞ！

……おさまった！？吃驚びっくりだよ！

梓は大人しくなっていた。

「取り乱してすいませんでした。」

「でも、梓の言うことも一理あるな。私たちもつとやる気をださな
いと」

……無反応。

「わかりましたね！」

「はーい」

漣が梓のフォローをし、収集はついた。さすが漣である。

また翌日

梓視点

はあ、昨日はみなさんに迷惑かけてしまったかた音楽室行きにくいなあ。

そこへ、空地先輩が来て声をかけてくれました。

「昨日はいろいろあったけど多分大丈夫だ」

「え？何ですか？」

私が疑問に思うと、先輩はとっさに返してきます。

「多分、動じて無いぞ」

先輩が音楽室のドアをあけると、そこにはまったりしている人々の姿。

「ほらな。」

私は、安心していいのか、不安になるべきなのか、分かりませんでした。

空地視点

俺と梓に気付いた、唯は、今から練習するつもりだったんだよと言つて

ギターを持ち上げるとひいた。が、すぐに倒れてしまった。

「やっぱりケーキ食べないと力が出ないよー」

そこへ細がケーキを持ってきて、唯の口にいれる！

シャキッ！

唯はHP全回復した！あ、違っ、復活した！そして、ギターをひいた。

上手いっ！

最初の演奏を10点とするならば、今のは80点といっても過言でない。

そんなこんなで、ティーセット撤去の危機は免れた。・・・どんな

だ。

そこへ、顧問が入室してくる。

「梓ちゃん！プレゼントだよ」

絶対猫耳だろ

「じゃーん！」

取り出したのは猫耳。凶星である。

「つげなさい！」

「やですよ！先輩達だつて無理ですよね？」

梓、この人たちはちよつとおかしいからこついうのに恥じらいがないのだ。

案の定、遷を除くおかしい女子3人は結局猫耳をつけた。

「さあ、梓ちゃんの番だよー」

つけられた。うん、可哀想に。男子で良かったわ。・・・関係ないか。

「梓、”にゃー”つて言つてみて！」

おい、何誘つてる！

「にゃー？・・・はっ、ついー！」

あら、混乱してしまつた様です。ここで絶対唯か律あたりが・・・

「あだ名はあずにゃんで決定だね！」（唯）

ほら。予想通りである。また怒らせることはするなよな！

「さて、そろそろ真面目に練習しようやお嬢ちゃん」

そろそろ面倒になつてきたので、とりあえず仕切ることにする。

まずは、梓に、演奏を聞いてもらうことにする。

梓視点

先輩達は、いつも遊んでいて、練習しているところを未だに見かけない。

なのに、何でみんなであわせるとこんない演奏になるんだろう。

私は外バンのライブをいろいろと聞いたことがある。

それは、この先輩達の演奏に比べて遥かに上手い。それは当たり前なのに、

この演奏を聞いた時の感動が、今までで一番感動した。何で？何でなの？

「本当は、本当にこの部活でいいのか迷っているんだらう？」

そこへ、空地先輩が問いかけてきた。凶星です。

「は、はい。私は今まで、いろいろなバンドの演奏を聞いてきました。先輩達の演奏より遥かに上手い演奏を。けど。」

「けど、何故かこの遊んでばかりの軽音部の演奏が一番感動したんだらう。」

「そ、その通りです。」

「それは何故かわかるか？」

「いいえ、分かりません。」

「確かに、練習をしつかりしているバンドと、こう遊んでいるバンドでは、前者の方が断然上手いに決まっている。けど、一番必要なのはチームワークの団結力だ。いくら個人個人の技量が上手くても、チームワークの団結力が無ければ、リズムはバラバラ、もう曲では無くなってしまふ。それは分かるだらう。」

「はい。」

「確かに、遊んでばかりの部活だ。もう部活で無いといつても過言ではないかもしれない。でも、彼女達はそうやってチームワークの団結力を高めていつているようにも見える。」

「あ・・・」

「そして、そのチームワークの団結力はもちろん、その楽しさが、そのまま音楽にできていると思うんだ。そうだらう？楽しい気分で演奏すれば、当然聞いている側も楽しくなる。悲しい気持ちで演奏すれば、観客側も悲しくなってくる。演奏する側の感情が観客にも伝わっていく。それが音楽だ。つまり、彼女等にはこれが、この、楽しい時間が、大事な練習の一部にもなっているんじゃないか？見てみる。皆楽しそうだ。」

先輩の言った通りだ。みんな楽しそうに演奏している。

「技術的評価をすれば、律のドラムは走り気味だ。唯はまるで音楽用語を知らない。けど、感情がこっちへ伝わっているから、感動する。伝わってくるんだ。」

「大丈夫。今は慣れなくても、きっと梓ならなじめるさ。迷ってるんだったら、こっちにいた方がいいと思うぞ。俺も楽しいからな。過去の傷だって吹き飛んでしまう程」

演奏を終えた先輩達はみんな楽しそうでした。私は、空地先輩の話聞いて、この部活でやり続けようと決心をすることができました。「やっぱり、先輩達の演奏は凄かったです！」

さらに翌日

空地視点

梓は、決断をしたようだ。俺は授業を終え、先生と事務的会話をした後、音楽室へ向かうと、そこはいつもと変わらない姿があった。梓がそこへ問いかける。

「昨日の話は本当だったんですか？」

「ふっ、多分な。」

そんなこんなで、俺達は新入部員を迎えて、部員数6人となったのである。

|| 1章 新入部員編 終了 ||

とまあ、こんな感じで1章終了です。

次回からは 第2章 いまのじぶん 空地伸と空地伸 かこのじぶん になります。

ちよつと、けいおんの物語らしさから少し離れますが。

第3話 過去・前編

|| || || || ||

憂が不良にからまれ、それをみかけて庇う唯。

果たして、平沢姉妹の運命はいかに！？

そして、ついに主人公の過去が明らかに！？

前編後編でわかるか、1つにまとまるかは現在不明です。

#03 過去（前書き）

今回は空地伸の過去が明らかになります。

今回は、面白い要素はあまりないですが、どっぞどっぞっへり。

#03 過去

第3話・過去

先日、部員数が6人になった。

入ってきたのは、割と真面目な子で、こんな自由で練習なんてあまりしない軽音部に本当に入ろうか迷っていたようだが、それは解決した。

俺が言葉をかけてやったのだが、まああんな説教臭くてながつたる内容をよく言えたものだと自分に感心している。

こんな出来事があったにも関わらず、軽音部は生まれ変わることも無いいつも通りであった。昨日の言ったことが自分でも恥ずかしくなってくる。

そして、新入部員は唯には「あずにゃん」と呼ばれ、顧問のさわちゃんにネコ耳をつけられ、全然馴染めていなかった。

律、漣といえば、「夏に合宿いこうぜ!」「まだ4月だぞ!」というやりとりをしていた。紬はなんか頬を赤く染めてそれを眺めていた。百合センサー?

このままじゃ拉致があかず、どう説得しても梓は軽音部を去って行くかもしれない。そうすると、いろいろ面倒なので、俺がきりだししておくとする。

「おい、ちよつとは練習しようぜ」

はい、多数決である。漣、梓はこちらに賛成してくれたが、唯、律、さわちゃんは反対。おい、軽音部だぞここ。そして紬は「遊びたいです」

裏切られた。結局、賛成3：4反対、となったのだが、「ちよつとはやれ!」と漣が律の頭を殴った。律の頭がふくれる。と、まあそんなこんなで、練習した。

「唯と梓 ギターが2人になったから演奏の幅が広がるな」

律が告げた。

「どっちがリードギターやる？」

さて、実力でいったら梓の方が上だ。それは梓以外、誰でもしっていることだ。だが……

「それはもちろん先輩が……はいはい私がやる！」

唯がとても自信ありげに鼻息を鳴らした。きつとこの時点で唯と梓を除く全員がこうおもったことだろう。

（この自信はどこから）と。

律がきりだす。

「一応二人の演奏を聞いてみてから決めた方が……」

するとまず梓がギターを持ち、演奏した。うまい。

一方、唯と言え、何か思考している。この後には絶対言い訳が……

「じ、持病のしゃくが……」

「……いい加減認めなさい」「」

俺と律が告げる。どう考えたって、唯に勝ち目はないはずだ。

「ところで、しゃくって何？」

……。

「知らんと使ってたんかい」

律がぼそっとつげ……

「あずにゃんギター教えて下さい！」

「……変わり身はええな!!」「」

今度は俺と律と漣が一斉につっこむ。

そして、……

「あ、そこはミュートして、あと、さっきのビブラートきかせた方が……」

あ、梓……。

「ミュート？ビブラート？何それ？」

予想通り、唯は頭から煙を出しているような状態で返してきた。

「こんなんでも一年間やってきたんだ」

漣が少し呆れながらも梓にいった。

「ミュートもビブラートもきかせずにどうやって…」

と梓が呟いていると、唯がミュートをしていた。できるじゃん。

「あれ？ミュートできてる…」

「あ、これがミュートっていうんだ」

唯は音楽用語が知らないからな。できていることも正式名称をしらなかつたりするわけだ。

「ミュートとは左手で弦を軽く触れて、音がのびないように弾くおしゃれ奏法よ。」

すぐそこでさわちゃんが解説していた。てかさつきからいたんだな。影うすいぞ。

「ずーん」

俺の地の文を読み取ったさわちゃんが部屋の片隅で沈んでしまった。放っておこう。

「唯はゲームかっても説明書読まないタイプなんだ…」

「納得です」

漣の分かりやすい発言に梓も納得していた。余談だが、この前新しいゲームを買った時に、説明書をしっかり読む憂と読まない唯が対戦した結果、憂が勝っていた。

と、まあ珍しく練習し、今日は解散となった。他の部員は先に下校し、俺は音楽室の鍵を職員室に返却し、教室へ忘れ物をとりにいった。下校した。

「じゃーね、また明日」「先輩、さようなら」

唯と梓はそういういつものバス停で、漣、律、紬とわかれた。

唯と梓はもう少し道が一緒である。少しの間楽しく会話して、分かれ道で別々になった。

しばらく歩いていると、近くから声が聞こえてきた。

「君、俺達と一緒に遊ばないか？」

「や、やめて下さいー！」

唯はすぐにその声を感じ取った。もう15年程一緒に暮らしているんだからわからないはずもなかった。

「憂!？」

交差点の右へ曲がるところ、人通りの少ない場所で、憂が不良達にからまれていた。

唯は助けようとも思ったが怖くて迷ってしまった。妹をかばうべきなのに、足がうごかなかった。

でも姉である。その動かない足を動かし、憂と不良の間に入った。

「私の妹にそんなことしないで！」

「お、お姉ちゃん？」

唯は分かっていた。多分このままどかなければ殴られると。けど、唯は憂の前からどこうとはしない。

「殴られなくなかったらどきな」

不良のリーダーだろうか。1人が手をあげた。唯は覚悟しながら目をつぶった。

だが、その手は来なかった。

「それはこっちの台詞だ」

唯がおそるおそる目をあげると、その不良が男、伸に殴られていた。不良のリーダーは数mふつとび、それを見た他の不良達も伸を殴ろうとしたが、それは難無く避けられ、蹴られ、殴られ、吹っ飛んだ。

「こっちへ来い」

1人の不良に唯と憂は腕をつかまれ、つれてかれそうになった。だが、唯が不良の腕に噛み付いた。

「痛え!このやろう」

不良は腕をあげようとしたが、伸がその腕を掴み、男を背負ってなげた。

不良達は勝ち目がないとおもったのだろう。全員ひいていった。

「大丈夫か？」

俺は聞いた。幸い唯が殴られそうになるところを見かけた為、2人はケガなどはせずに済んだようである

「うん。ありがとう」

唯が問い返した。俺は助言でもしておくことにしようか。

「無防備に突っ込むんじゃ無くて、ああいう時は誰かに助けをお願いした方がいいんだぞ」

こんどは憂。

「あ、有難うございます。あのう、家にきますか？また両親いないんですが」

またか。4日前もいなかったのに。

俺は折角なので邪魔することにする。

前にもいったが、俺は帰っても1人なのだから。

唯と憂は、2階で私服に着替えている間、俺は下でテレビをつけて見ていた。

「そういえば、伸は記憶喪失してからもう半年たったね」

「いつからここにいたっ!？」

見れば、唯がとなりでテレビを見ていた。いつからいたんだ。気配でも消したのだろうか。

さて、今気になるワードが出た。

『伸は記憶喪失してからもう半年たったね』

そう。俺は記憶喪失さ。半年たったんだ。記憶を無くして。

基本的な知識は残っている。たとえば、バナナというものは果物で、黄色い、木になるとか、そういう知識はあっても、実際においしいのかはわからないのだ。記憶喪失以降、初めて食べるものは。

俺は小学生の頃、母親と父親を交通事故で亡くした。道路を車ではしっていると、後ろからトレーラーが突っ込んできた。運転した父親は頭を強く打ち、母親は俺をかばってまた頭を強く打ち亡くなった。

以降は、実家にいた祖父母がこっちまで来てくれて、俺の世話やら

いろいろとしてくれた。けど、小さいころにいた自分は心の傷はいえなかったのだと思う。

俺は高校生になると、実家の方の高校へいったらどうだといわれたが、友達と離れたく無かったので、1人暮らしをしていたらしい。ここまでは祖父母から聞いた話だ。

唯と憂に出会ったのは、幼稚園の頃。唯と憂が外で遊んでいたところを、俺が見かけ、一緒に遊んだ。それからよく遊ぶようになったらしい。

これは唯から聞いた話。

そして、俺は半年前、交通事故にあった。その原因は俺が歩道で歩いていたら、車が突っ込んできただけ。不幸である。

そのときの頭のうちどころがわるかったのだらう。俺はそのとき知識以外の記憶を失ったのだ。

目がさめた時、俺は病室のベットで横になっていた。みれば、すぐ横には祖父母の姿が合った。その時、俺が言ってしまった言葉。

「あの、どちら様ですか？それと、俺の名前、もしかして御存知ですか？」

祖父母は泣いていた。涙を流していた。それはそうである。可愛かった自分の孫が、交通事故にあい、さらには記憶をなくし、俺が平然と「どちら様」と聞いてきたのだから。

俺は記憶を無くした。今は親の顔は写真で分かっている、声は分からない。

そして、転校するまでの半年が辛かった。

俺は退院し、その次の週から学校に行くことになった。

その時は自分がまるで転校生みたいな感じだった。友達の顔と名前さえ覚えていなかったのだから

「よう、伸心配したぜ大丈夫か？」

何人も声をかけてきたが、俺は友達の名前を覚えていない。すぐに返せなかった。

数日もすれば、俺がおかしいことに気付いたのだろう。心配する人も現れた。だが大半は、俺に話し掛けなくなり、心配してくれた人も徐々に減って行った。友達は何人になった。何故か。俺が記憶喪失であることを告げても、誰も信じてくれなかったからだ。

俺は毎日気まずい生活をしてきた。転校した理由はそこ。一度転校して、そしてやり直したかったからだ。

じゃあ、何故桜ヶ丘高校を選んだか。それは幼馴染みがいたからである。

数日後、俺は幼馴染みである唯の家へいった。勿論、俺は記憶喪失をしているのだから、唯、そして憂の名前は知らない。

「実は、俺、記憶喪失なんだ。」

信じてくれないと思った。40人に話して、信じてくれる人は0人だったから。

だが、帰ってきた返事は意外だった。

「え？ そうなんだ」

いつも帰ってくる声は「冗談がつまらんぞ」とか「嘘だ」で終わってしまっていた。

「そうなんだ」と返事が変えてきたのは、今回が初めてだった。

「それで、いろいろと困ってるんだ。友達とかいなくなっちゃったし。」

俺は続きを真剣に相談した。唯はしばらく考え、そして言った

「じゃあ、転校すればいいんじゃない？」

俺が真剣に相談した為か、唯は普通に返してきてくれた。今の普段に比べれば、だが。

「それは思っている。だが、転校先がみつからなくて」

唯はすぐに返した。

「桜高にすれば？ 来年度から男女共学だし。」

「え？」

桜高は、今の俺と唯が通っている学校。唯の母親は言っていた。

「唯ちゃんは、友達が沢山いるから、きっと伸くんが困っている時に助け舟をだしてくれるわ」と。
今の状況からして、唯が助け舟を出す訳無い。と思っていたが、結局俺はそこへ転校することになった。
そしてもう、記憶喪失から半年がたっていたのだ。

「早いなあ。もう半年なのか。」

憂が作ってくれた食事を食べながら思い出していた。

「ていうか、伸ここに住んじゃえば？」

唯がいった。

「……は？」

「家帰っても、1人なんですよ？ならいいじゃん、そうすれば私もつとゴロゴロできるかも」

「自分のためじゃねえか、誰がお前に奉仕するか！」

憂は笑っていた。つられて俺と唯も笑った。

心の傷はまだ完全には塞がっていない。けど、唯、憂、そして軽音部のみんなはそれを忘れさせてくれる。俺はこの場所に居続けたいと思ったのだった。

んで、数日後の俺といえば。

「伸、もつと働けー！」

勝手に居候にされ、朝食と夕食を作る手間が省けたのはいいものの、土日の掃除は俺が担当だ。

なんか自分の家に早く帰りたい気もするような、もうどうでもいいような。

|| 2章 空地伸いまのじぶんと空地伸かこのじぶん 終了 ||

伸の過去は1つの話でまとめることができたので、
これからはばらくは普段通りの軽音部の様子になるとおもいます。

04 ゴルデンウィーク

ゴルデンウィークも特訓するために合宿することになった軽音部。
今回は山らしい。しかし、特訓する為に来たはずなのに、遊んでは
かり!?

……おい。練習はどうなるんだ。

#03 過去（後書き）

4800文字入力するだけで肩が痛くなってきました。

ちなみに音楽の知識はありますが、ギターとかやったことのない私です。

04 ゴールデンウィーク

第4話：ゴールデンウィーク

唯と憂を助けた次の日、俺は案の定校長室に呼ばれた。

退学かなと覚悟はしていたが、唯と憂が事情を説明してくれた為、今回は処分無しということになった。

もうすぐ4月も終わり、5月になる。5月といえばゴールデンウィークという大型連休がある。

大型連休というものは前日まではなんか小学校の遠足の前日のわくわくと同じような価値があるものの、実際に当日になると急にやる気がなくなってくるものだ。これだから人間は不思議である。

で、何もやる気がしないまま、学校登校日になると、いろいろ後悔する訳だ。

「ゴールデンウィークに山にいこうぜ！」

とつぜん律がこんなこというわけだから、休みはやる気がなくなることはなさそうだ……って、ええー!?!?

「早速泊まるのか？俺、あまり金ねえぞ」

「私もあまりお金ないですよ」

軽音部の事情も良く知らなかったもんだから、真剣に俺と梓が返すと

「大丈夫、ムギの別荘をかりるから、宿泊は無料！」

「経費0円になるのか（宿泊代）。って、ムギ？」

「紬、いいの？」

「全然構いませんよ？ってどうかしました？」

俺は固まっていた。お金持ちがこんな身近にいるとは……。

「で？強化合宿なの？」

「いいや、どうせ遊ぶんだろ。2人のことだし」

「うむ。納得」

遷に応じた。唯と律は「双眼鏡もってこーぜ！」とか「川で遊べる

のかなあ」と遊ぶ気まんまんである。バードウォッチングでもするのか？

自由だな……。軽音部。近くにはぼかーんとしている梓がいた。

「梓、軽音部には慣れたか？」

「いえ、全然慣れませんが、ていうか慣れたく無いです！」

俺は笑ってやった。「そろそつだ」と。

唯の家での居候生活5日目。明日からゴールデンウィークである。合宿は2泊3日らしい。居候に関しては、唯の両親も難無く俺を受け入れた。

俺は元々客室だったスペースで毎日を過ごしていた。だいたい部屋は6畳なので、せまいことはない。

俺は電気を消して、寝た。

.....

もう朝かとおつばやきながら、腕を布団の外からだし伸びをすると、俺は起き上がる。時刻は6時。集合時間は駅に8時だ。駅までの所要時間をさし引いてもあと1時間40分くらいの余裕がある。

2階からは憂が唯を起こしているようだが、なかなか起きてくれないらしい。

「やれやれ」と、俺はとりあえずリビングに向かった。

ふつう、文化部の合宿と言ったら1泊2日で十分(自分のイメージ)だと思うのだが、日程は2泊3日。

「.....」

降りてこない。朝食どうしようか。珍しく朝からお腹が減っている。何か食わないと餓死するぞ。

自分で準備をしようかと考えていると、リビングに、髪立ったパジャマ姿の女の子が入ってきた。

「あ...あの...どちら様？」

「私だよ」

髪が立っていたとしても、顔だけで判断はできる。俺は朝からいき

なりポケてみたが、相手は完全に起きていないらしく、気のない返事が帰ってきた。

……ていうか、今俺はポケたのか？

「あっ、そうだ、今日合宿じゃん！」

今頃か。もう完全に寝惚けているな。

唯は机に座ってだら〜んと机に顔をのっけて、「ご飯まだ〜？と。マイペースだ。

「おい、ご飯はいいが、まず顔を洗ってきたらどうだ？」

「ほうわ？」

駄目だこりゃ。使い物にならないな。

まあ、強制的に唯を洗面所までひきずり、顔を洗わせたのは当然である。

目がさめたようなので、ついでに髪もちゃんと整えさせた。

…しかし、髪を整える仕上げは憂が毎日やっている。姉として恥ずかしく無いのか。

とまあ、思考しているうちに駅に着いた。

「よし！これで全員そろったな。軽音部、しゅっぱーっ！」

「……おー……」

律の合図に、唯、漣、紬がテンション高く、一方俺と梓はとまどっているのか乗り気ではないのかわからない返事をし、出発した。

『本日は ×線を、ご利用頂き、誠に有難うございます。次は、

です。全てのドアから……』

ワンマン列車に乗り込んだ。列車のアナウンスが列車内に鳴り響く。今日はゴールデンウィークにもかかわらず、電車内は割と空いていた。8人座れるスペースがあったので、その場所を確保し、座ることが出来た。

俺は、どこの山に行くのか全く聞かされていない。降りる駅は切符の値段で分かるが、インターネットで調べた結果、山などなかった。一体細の別荘は何処にあるのだろうか。

「なあ、紬、別荘はどこにあるんだ？山なんてなかったぞ」

と、聞いたが、紬はもうあっちの世界へ行ってしまったようだ。見れば、唯と漣と律が何かじゃれあっていた。

梓と言えば、一番端（俺の反対側）に気まずそうに座っている。そりゃあ、とけこめないよな。

『まもなく、××、××です。前の後ろのドアしか開きません…』
電車のアナウンスが入る。降りる駅だ。

「ここ、2両目じゃねえか？」

一行は、前の車両に移動し、降りた。

「ムギ、別荘はどこにあるんだ？」

俺が聞こうとしたことを律が聞いた。すると紬は……

「あそこです」

指を指した先には、とんでもなく急な坂道があった。

傾斜は見た感じ60°から70°である、かなり急で、かなり高いようだ。

こんな山あったっけ？俺の調べミスか？

「ここは、もともと平地だったんですよ」

嘘だ！嘘だ！！嘘だ！！！！

平地を埋め立ててこんな標高1500mもある山がつけられるのか？信じたくも無い。

「もう疲れたよ」

標高およそ500m付近で唯が呟いた。

実際、この山を平気で登っているのは俺と紬ぐらいである。

梓、漣はかるうじてついてきているが、唯、律は完璧なまでに遅れをとっていた。

「ちよつと休憩しようぜ、もう疲れた」

律の独断で決定してしまった。全員で水筒の飲み物をのんでいると、紬が忘れてたんだと言わなかったのかしらないが、結果的に全員に突っ込まれる発言をした。

「あの、ロープウェイがありますよ？」

「……あるんだったら早く言え!!!」

と、100mほど下って、分かれ道を右にいき、少し歩くとロープウェイがあった。

『自家用』

確かにそう書いてあった。もしかして、琴吹家の私有地か？

「こ、これは琴吹家の娘さん!どうぞどうぞもう御自由につかってください」

確信した。……にしてもとんでもないほど金持ちだな。

ロープウェイにのると、頂上がだんだん見えてくる。……ガタン!

「うわっ!」

急にロープウェイが停止した。

「何で止まったんだ？」

澗が律に訪ねた。律がチャンスと言わんばかりの顔をして、返答した。

「昔、ロープウェイを利用した登山家が……」

「聞こえない…怖くない…聞こえない…怖くない……」

律が怪談口調で言ったものだから澗は完全にいつてしまった。それを舐が宥めていた。

ロープウェイが動き出す。慣性の法則通り、体がぐらつく。座っていた澗は前に倒れた。ガンッ!といかにも痛そうな音を発した。

「痛たたたた……」

澗はその衝撃でやっとな帰ってきたようだ。

因みに、梓と唯はスキップをとっていた。いつのまにか舐の百合センサーも反応している。

頂上に到着した。その先には、いつも住んでいる家と比べたら立派な家があった。別荘がこんなだから、きっと家は普通の人なら誰でも口をパクパクさしてしまいそうな豪邸なんだろう。

「残念ながら一番大きい別荘は借りられませんでした。すいません

が、これで我慢してくれますか？」

と、言われても俺にとつて、勿論紬を除く全員もこんな豪華生活めつたに無い訳で。我慢すると言うより歓迎しますとも。ええ。

他の4人も「まだ上があるのか」と言わんばかりの顔をしていた。荷物をおいて、とりあえず楽器の機材がいろいろあり、防音が施されている部屋へと向かった。

「こんな高そうなアンプ、使ったこと無いですよ」と梓。

「確かにすごいな……」と漣。

「みるみる！スネアが新品だ！」と律。

ま、そんなこんなで、律が「さて……」と切り出す。

「練習するんですね！」と梓がギターを取り出そうとすると……

「遊ぶぞー！！！」

「遊ぶんかいっ！」

俺がツツコんだ。梓、漣がこれに賛同。しかし、唯と紬が遊ぶというので、3対3。

「私も遊びたいーい！」

結果、4対3で遊ぶことになるらしい。………って

『さわちゃん（先生）！？』

全員が驚いた。

「まったく、道が急で1500m登るのにつかれたわよ」

「さわちゃん先生、ロープウェイ使わなかったんだ」

唯の発言に、さわちゃんは「あつたんだ……」と沈んでしまった。

「じゃあ、遊ぶぞー！」

「んで、何して遊ぶんだ！」

「スキー！」（唯）

雪積もって無いのにどうやってやるんだ！

「ビーチバレー！」（律）

ここ山だぞ。

「紅葉狩り！」（唯）

紅葉は秋です。いま春なり。

「バードウォッチング！」（律）

急にまともだな。

「遊ぶもんねえ。」

出た意見はたった4つ。1つ忘れて無いか…？

「あの、川で遊ばないんですか」

「そうだっ！そうだよムギちゃん！」

どうやら忘れていたらしい。

別荘から3分程歩いた場所に、浅い広いスペースがあり、そこで遊べるようになってる。

川はどうやら人工的に作られたものようで、蛙はいても魚はいなかった。もともと平地だったというのは信じてもいいのかもしれない。

俺は別に川で遊ぶ気になれなかったので、袖から借りた椅子をにすわって携帯ゲーム機で遊んでいた。

つまり、俺は今から自分の世界に入って訳だから、作者さんよろしくな。

「あずにゃんも一緒に遊ぼうよー」

唯が梓を誘っていた。

「結構ですっ」

練習より遊び優先であることが気に食わないのか、梓は軽く不貞腐ふてくされたような表情でそう言った。

そこへ、何が何でも梓を誘ってやるというオーラが出ているようなでていないような感じのする律が梓を挑発した。

「あー さてはスポーツとか苦手な人？」

それに、梓は乗った。

「そんなことありません！ やってやるです！」

「よーしっ！やるぞー」

そして、唯、律、梓の3人で、川の中でビーチバレーボールを使って遊んでいた。

「梓ちゃんも、すっかりみんなと仲良くなったわねー」

「……そうか？」

それをムギと漣は傘の下で見守っていた。

「唯先輩、律先輩、バレエ上手ですね」

「へへん、中学生の時にバレエやってたんだ」

唯が自慢をする。しかし律が「唯って運動音痴じゃなかったか？」

と言つと、「はい、嘘ですごめんなさい」と言った。

「でもでも、私体育『3』だもん！」

「私は体育『5』なんだぞー」

「うん、それでこそりつちゃんだよ！」

「何だその言い方、気に食わんぞ」

「ああっ！りつちゃんやったなあ！」

唯と律の2人でのボールの当てあいが始まった。梓は「あゝ」というが2人は麻たく動じなかった。

そこへ、いつの間にか目の前に現れた漣が、律の頭を叩いた。

「なんでいつも私だけ……」

それを唯と梓が「おおー」と眺めていた。

「そういえばさわちゃんは何処へいったんだ？」

*

「おーい、みんなどこー？」

さわちゃんは道に迷っていた。

夕方になり、俺たちは別荘へ戻り、練習をすることになった。

「梓、真っ黒だな。一番はしゃいでたんじゃないか？」

「そんなことないですよ！私はちゃんと練習もするもん！」

どうやら梓は日焼けしやすい体質らしい。

先程の部屋へ入ると、律は早速位置につき、「スネア新品ー はや

くやるうぜ！」と乗り気だった。現金なやつである。

梓は、チューナーをとりつけ、チューニングをしていた

「あずにゃん何それ？」

「これですか、ただのチューナーですけど……」

「へえ、チューナーっていうんだ」

「へ？」

梓は驚いていた。大丈夫、俺も今心情は一緒だ。

「唯先輩、チューナー知らないんですか？チューニングはどうやって……」

「え？適当に……」

唯は、本当にあっているのかわからないがチューニングをし、そしてギターを弾いた。

「ぜ……絶対音感……！！……すごいのかすごくないのか分からないんだ……」

小さく呟いていた。唯は絶対音感ではないのかと俺は思うが。

「よし、やるぞ！」

そして、練習をはじめることにした。

『君をみてるといつもハートDOKI DOKI 揺れる思いはマシユマロみたいに……』

手始めにふわふわ時間から練習した。全員がピッタリと合っていた。

「今の すごくいい感じでしたよね!？」

「みんなピッタリあったわね」

全員が練習したのかしてないのかは知らないが、この前より上達したのは明確だった。

「律もリズムキープがしつかりできてたな。特訓でもしてたのか？」

「お腹がすいて力が出ないよう」

律は倒れ混んでいた。澁は「お腹すいてるから余分な力が抜けたのね……」と呆れていた。

材料はあったので、カレーを作り、全員で食べた。幼馴染みでありながら知らなかったが、唯も玉葱のみじん切りくらいできるらしい。だったら妹を手伝ってやれ。

飯を食べ、見事に復活した律は唐突に「肝試しをしよう」というか

らすることになった。

くじ引きの結果、漑&梓、俺&唯、律&紬のペアということになった。

まずはじめに漑と梓が発射した。

（作者視点）

「こ…高校生にもなつて肝試しなんてねえ」

「あの…手が痛いんですけど…」

漑は梓の手をとり、ギュッと握っていた。

すると、誰かが梓の肩をポン、と叩いた。

「誰？」と後ろを振り向くと、そこには幽霊の姿があった。

「やつと見つけたあ…」

（主人公視点）

『ヒイヒイ』

どこからか誰かの叫び声が聞こえてきた。

「んー、これは様子を見に行った方がいいんじゃないか？唯と律と

紬も来いよ」

すると「ほーい」「はい」と威勢のいい返事が2つ返ってくる。

「あれ？律は？」

「りっちゃんなら、脅かしてくるとかいつて先回りしてたよ」

俺はやれやれと思いつながら、とりあえず2人の元へ向かうことにした。

少しいくと、気絶している漑と、さわちゃんと梓がいた。

「さわちゃん先生、こんなところにいたの？」

「皆を探してたんだけど、道に迷ってしまつて…」

「漑先輩、大丈夫かな？」

気絶している漑を、紬が一生懸命起こしていた。

そして、肝試しはかつてながら中止となった。

「お風呂にはいるうー！」

唯が切り出したので、俺と女子は別行動となった。

俺がのんびりと風呂を1人貸しきり（男女別で風呂があるって宿泊

施設かと思っただがそれはおいておくとして、で入っていると、隣から騒がしい声が聞こえてくる。

『みんな、勝手に帰るなよー!』

そつえば律のこと忘れていたな。

『誰だ!?』

……………え!?

『私だ。』

……………状況が全くつかめなかった。

『前髪なげーな』

今やっと掴めた。律は前髪を後ろにもつていつてたな。

『そつえば、梓熱いの駄目なの?』

『こついうときは、勢いよく入った方がいいんだよ』

ジャボツ! ……ザバツ!

『いったあーい!』

『ああ、日焼けで痛かったのか、あずにゃんごめん』

もう今日は寝るぞー!ということになり、一行は寝ることにした。

俺は、流石に女子らと寝る訳にはいかなかったため、別の部屋でねることになった。

トイレに行きたくなったので、部屋からであると、軽音の練習をした部屋の明かりがついていた。

『……………ちよつとテンポを遅くして弾いてみればいいんですよ』

部屋には唯と梓がギターの練習をしていた。

唯は梓に言われた通り、「ふでペン　　ボールペン」の前奏、間奏部分を弾いた。

『できた!』

梓のアドバイスの通りやって、そして唯は苦手を克服できた。俺はそれを暖かく見守つてあげた……………のだが。

『伸、のぞき!?』

唯に気付かれてしまった。俺は仕方なくドアを開け、入ることにし

た。

「いや、練習してるみたいだったから」

「うん、ここ弾けるようになったんだー」

唯は御機嫌だった。俺と梓は微笑んだ。

「あずにゃん、ありがとー」

唯は梓に向かって飛び込んだ。……そんなことしなきゃ尊敬されるのに。多分。

でも、梓は嫌そうな顔をしながらも、嬉しそうだった。

そんなこんなで、あつという間に2泊3日の合宿は終了した。

2日目は、あまり遊ぶことはなく、真面目に練習をした。

2日目の夜も、唯と梓、そして強制的に俺も加えられ練習をしたのだった。

今回の合宿は、いい合宿だったのかもしれない。

「あー、楽しかったな、夏休みは海にいこうぜー」

律が勝手にまだ3ヶ月も先の合宿の計画をたてていた。

「……気が早いだろ！（ですよ！）」「」「」

俺と漣と梓でツツコむ。いつも通りの風景である。

5 試験前の休日

試験まで残り1週間。計画的に勉強していた唯に対して、

1週間前まで勉強していなかった唯。試験まで5日をきった休日、唯は伸に助けを求めた。

04 ゴールデンウィーク（後書き）

どうも初めまして……かな？ stringHzです。

今回は、けいおん！ 新たなる軽音部 を読んで頂きまして誠にありがとうございます。

こんな小説を書くのだから、きっと作者はけいおん厨なんだろうとでも思っていて下さって結構です。音楽については基本的な知識はあるので、かけるわけですが、小説をかくことに困ったことがよくあります。

私の場合は、誰が話しているかがどうしても見分けがつかない時のぞき、

唯「 だよ！さわちゃん先生」

という「」の前に名前をいれておくパターンを使っておりません。

つまり、律と漣は梓を2人と「梓」と呼ぶ訳ですから、ちゃんと喋りかたや口癖をはっきりさせないと見分けがつかなくなってしまいうわけです。

その場合は大抵、伸の一人称で解説をいれてやるんですけどね。

今回の合宿の話は、6500文字で、いつもの1.5から2倍の文章量ですが、実際400字詰め原稿用紙16枚ほどにしかならないんですよね。やはり執筆は趣味の範囲で無ければやっていられませんかね。

けいおん！は漫画をそのまま文章にすれば、500文字/1話くらいになってしまうので、当然オリジナル8:2原作くらいの展開をやっていってると思うのですが、私まだまだ未熟ですので、文章を読み直すとここおかしいんじゃないと自分で思う時もある訳です。そうすると自分でも恥ずかしくなってきました。

今この小説の執筆で困っているのが、ムギの登場回数が少ないこと。ムギって、原作でも登場が皆に比べて少ない気がします。…沢庵ネタをいつか使うしか無いか。最後の切り札です。

この小説は先程述べたように原作の内容をちよつと取りあげながら、オリジナルな展開をしていっております。この小説を執筆しはじめたときには、もう既に2巻発売中&アニメ終了ですので、過去へ戻っているんですね。つまり、原作の内容をいれないと、いろいろ後で大変になるようなならないような気がするんです。（良く分かりませんが）

さて、全然話しがかわりますが、けいおん！3巻が12月発売のようです。きららは読んでいないので、楽しみにしております。

最後に、今までこれを読んで下さった皆さん、これから読んでくれる皆さん、そしてこの後書きを読んで下さった皆さん、本当にありがとうございます。

次回の執筆も頑張ってやらせていただきますので宜しくお願いします。

05 試験前の休日

さて、俺が過去を明かしてから、急に一人称の語りが普通になったと思っただけさん。それは事実です。過去を明かしてから『……らしい』を使わなくなったのです。

これは単なる著者が面倒になったのではなく、読者への配慮と想ってもらえれば有り難いのですが、単なる言い訳にしかならないと思うので聞き逃して下さい。

あのとんでもなく1日が長く感じた合宿からもう何日も日が過ぎていった。

その間と言えはいつもの通りといえば分かってもらえるだろう。適当にティータイムでもして、適当に遊んで、適当に練習しているだけである。

こんな部活らしいことをしていない部活、もしくは同窓会なんて、この世に他に存在するのか調べてみたら、某作品の 団くらいなのかもしれない。まあ、それよりはましなのかもしれないが。

ところで、俺の語り口も、だんだん某作品に似てきたような似て無いような気がするが、まあそうだったところで著者が急な設定の変更をする訳でもないのですのままにしておくのでしょうか。

それで、今の俺といえば中間テストへ向けてノートやら教科書、参考書と睨めっこをしている状態だ。

前いた高校は、それほどレベルが高く無いらしく、ちよいと勉強すればまあ上位くらいの成績は楽々ととれてしまうのだが、桜高は割と優秀な上に軽音部のメンバーも成績は上位らしいので、まあ80点以上はとっておかないとなんかいろいと馬鹿にされそうで、対応が面倒になる気がするのですっかり勉強しておこうと思っただけ。しかし、そんな勉強に珍しく打ち込んでいるのに対し、唯といえば、2階でさつきからずっとギターを弾いている。練習はいいことだが、テストで追試が確定してしまえば、この学校の規則では部活動禁止

である。そうなればギターの練習も意味が無い。

なぜならば、唯は1つを集中して覚えると1つを忘れるタイプだ。つまり、唯の場合はギターの練習と勉強のバランスを保っていかなければいけない。難しいように感じるが、どうやら唯はちゃんと勉強すれば出来る子らしいからな。バランスを保つことは割と楽っぽい。

だがしかし、唯を勉強モードにさせることが難しいことである。幸いお菓子が好物な上、いくら食べても太らない（自称だが）のでお菓子を利用して勉強させることは可能なのだが。

まあ、勉強しようがしまいが彼女の勝手なので、テスト2、3日前までは放っておくとするか。

因みに、憂は勉強を教えなくても成績優秀だ。もうテスト2週間前の昨日から計画を立てて、しっかりと勉強をしているらしい。姉と大違いである。

数学なんてものは、計算の方法を理解していればあとはそれを応用させるだけである。しかし、地歴なんてものは大体丸暗記しなければならぬので困る。2週間前から一生懸命覚えても、テストの日まで覚えているかどうか問題である。

テストは再来週の金曜日にある。仕方なく俺もある程度の計画を立ててみた。

テストまであと10日。軽音部で他に勉強しているのは予想通りで、漣、紬、梓。唯と律は全くもって勉強をしていないらしい。

俺は今日は理科の勉強をことにした。化学反応式やイオン式やらまあいろいろ覚えた。俺は理科が得意ではあるが、強いていうならば苦手な分野は生物だ。生物とかは実験が少なめなので、なかなか意欲が湧いてこない。

得に教科の先生の催眠術効果は全員に効果抜群である。唯、律はもちろん、授業が終わった頃にはクラスの数人は沈没している。もし

これが男女共学で、男子と女子の比率が1：1であれば、クラスの1/3から1/2は完全に落ちていただろう。

テストまであと9日。テスト1週間前、つまりあと2日で部活動は原則中止となる。

「いやあ、最近ギターの練習捗ってるんだー」

「ギターもいいがちゃんと勉強しているのか？また追試になるのは勘弁してくれ」

澁曰く、以前唯は赤点をとったらしい。

「そういえば、中間テスト！」

今頃か！もしかして知らなかったのか、いや昨日全員に聞いたから一応は知っていたはずだ。つまり……うーむ。

中間テストがあることをちゃんと知ってからも唯は勉強をしなかった。相変わらず2階からはこの前から比べればしっかり上達しているギターの音が聞こえてきた。

テストまであと5日。部活動は中止となり、本格的にテストの準備期間。

俺と唯が、他の軽音部と分かれて2人で下校している。

「なあ、勉強本当にしてるのか？」

俺はとりあえず聞いてみることにする。

「うん、がんばってるよー」

自信ありげな顔で嘘のオーラを背景に言っているのだが、まあとりあえず俺は信じることにしておく。どうせ本当にやっていなかったら教えてっていいにくるのだろうし。

俺は夕食を終え、自分の部屋で日本史の年表を暗記していた。丁度いつもしているはずのギターの音はなく、代わりに階段を昇り降りする足音がだんだん大きくなってくる。

ガラッ！

ドアが開いた。

「勉強おしえてえ〜」

予想通り、唯は部屋にやってきて、その一言を述べた。

俺は一度意地を悪くして「自分でやれ」と言ったが、練習していたのかといわんばかりの可愛い顔して「お願い」といわれ惨敗。俺弱え……。

んで、教える教科は数学？。

「んで、ここをこうして……」

「ああ、なるほど……」

「ありがと〜」

と、まあ、0時までやった。俺の勉強時間を返せ。

まあ、そんなこんなでテストの当日。

本来ならば、ここでテストの手応えを言うものではあるが、テストが終わった後はもう忘れたいので、やめておくとしよう。

数日がたち、テストが返却された。

「合計点発表会を始めます！」

律が切り出した。

俺：453 / 500点

唯：455 / 500点

律：426 / 500点

漣：449 / 500点

紬：443 / 500点

梓：437 / 500点

まさかの全員400点越え。軽音部ってなにかと優秀な割に、普段がだらけているな……。と、数人が思ったに違い無い。

そうして、中間テストは幕を閉じたのだ。

06 軽音部活動日誌1!

この活動日誌は今年4月から中間テストまでのささいな出来事を綴った日誌である。

#01～05であかされることの無かった出来事がいくつか述べられます。

05 試験前の休日（後書き）

御愛読のみなさん、こんにちは。いつも有難うございます。

「小説家気取って後書き長々と書いてんじゃねえ！」と思いの皆さん、すいません。

私、先日誕生日でした。伸と唯と誕生日が2日しか違いませんが、嬉しいです。それはさておき。

今回は前回の6500文字に比べ2500文字です。まあ文字数で小説の内容や上手さが決まるっていうわけでもないのですが。

今回はところどころ内容を省いたりします。理由は……特にありません。

漫画見ている限り、勉強すれば、軽音部は点がとれるので、全員400点越えという勝手な設定をさせて頂いております。

さて、話がそれますが、私、今回作文コンクールなるものに代表として作品を出すことになりました。

まだ賞がとれたと決まった訳ではありませんが、まあ、結果はどうあれ、代表になったことは嬉しいですね。

さて、次回はショートストーリーなるものをいくつか集めた話をつくっていききたいとおもいます。私はギャグ漫画家のようにネタがなかなかでてこないのので、文章に困ります。

最後に謝辞を。

今回の話、自分で読みなおしたら（この話駄目だな。文章も…）という感想を自分自身でも感じております。

「じゃあ、小説かかなきゃいい」とか「修正しなされ」と思う方は、

それは心の中で思っておいて、これからの成長を暖かく見守って
いただければ幸いです。

では、今回はこれくらいで失礼致します。

番外編 けいおん！ アニメ2期決定（前書き）

ガセではありません。ちゃんと公式サイトの方の7巻宣伝画像の下の方に書いてあります。（ライブで発表されたようです）

残念ながら放送日はまだ正式に発表されていませんが、今年中という噂はあるようです。

OPやEDの情報も流れているようですが、ライブ未参加でどこまで情報が公開されたかは不明ですから、公式サイトやPVなどでの曲名発表がされるまで情報は載せてません。一応あくまで小説ですからね。

番外編 けいおん！ アニメ2期決定

小説とあまり関係ないんですが、まあ番外編の長短編ってことで。

唯「この小説がアニメ化決定だよー」

漣「アニメ化するのはいかきふらい先生の書いた漫画の方のけいおん！だぞ。それに2期な」

律「あれ、漣は動揺してないな？」

漣「もう14回（ ）もアニメに出てるから、慣れててな」

律「おい、やつば震えてるじゃん」

紬「あの時の練習の成果を生かさないと」

律「やつぱりムギは変わってないな」

唯「あずにゃんは？1話からアニメに出るチャンスだよ」

梓「わ、私は別に………出たいなあなんて思ってたんですけどよ」

唯&律「今ちよつと考えた」

漣「ちよつと待て！漫画3巻の内容を少しパクってないか!？」

律「そんなことないって」

さわちゃん「私も2期に向けてちゃんと練習しとかないと」

唯&漣&律&紬&梓「さわちゃんいたの!？」

さわちゃん「2期決まったならすぐに報告しにきなさいよ」

律「いや、まだ放送日とか未定なんですけど」

さわちゃん「これがアニメでの衣装よ」

律「こんなの着れるかよ。なあみんな……って唯とムギ何躊躇い無く着るんだぞして梓まで着てるし!」

梓「はっ！また着てしまった」

伸「俺を忘れてないか？」

伸以外一同「!！」

伸「忘れてたんだな。んで、聞いたぞ。この小説がアニメ化するって」

律「だから違うつて。伸は残念ながらアニメには出れません」

伸「まあいいわ。俺どうでもよかったし」

さわちゃん「なにその反応。見損なつたわ」

伸「別に見損なわれてもかまわないんですが・・・」

唯&紬「そんなこんなで2期決定だよー、よろしくねー」

律「勝手に締めるな！」

() () けいおん！ Blu-ray & DVD 7巻に14回
(番外編) が収録されます。

と、いうわけで2期が決定しましたね。

まだ放送局、日程は決まっていりませんが。

ちなみにSSですが、ネタが思いつきません。頑張つて書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399i/>

けいおん! 新たなる軽音部

2010年11月3日17時52分発行